

苗齢及び電照の有無が四季成り性イチゴ‘みやざきなつはるか’
の収量・品質に及ぼす影響

○野崎克弘・黒木利美
(宮崎総農試)

【目的】

宮崎県の高冷地では、四季成り性イチゴ「みやざきなつはるか」を用いて夏秋イチゴ栽培を推進しているが、8月以降の収量の低下が技術的な課題の1つになっている。その課題を解決するために、今回の試験では、苗齢および日長時間（電照）が生育・収量（花芽分化）・品質に与える影響について検討する。

【材料および方法】

品種は「みやざきなつはるか」を用い、日長条件の比較では自然日長区に対し電照区は2009年5月22日より午前0時から1時間の暗期中断を行った。また、電照有り、電照無しそれぞれの区には苗齢の比較として、130日苗区（慣行）、130日小苗区（24穴スクスクレ）、55日苗区、25日苗区を設置し、苗齢と日長条件を組み合わせた8処理区を設置した。試験は冷房装置を設置したガラスハウスで実施し、日平均気温を25℃に設定した。試験規模は1区9株の反復無しとした。定植は2009年4月22日に60cm×20cmのプラスチック製プランターに行った。基肥は株当たりN1.0g、P₂O₅0.8g、K₂O1.0g（エコロン[®]トータル313、40日タイプ）を施用した。定植後30日目からOKF-1の2000～3000倍液を排水ECが0.3～0.6の範囲におさまるように施用した。摘葉は古葉を中心に適宜実施した。摘果は行わなかった。

【結果および考察】

1) 苗齢の収量・品質への影響

電照無しの条件で苗齢の影響を総収量で見た場合、

130日苗区と130日小苗区がほぼ同等の収量で最も高く、55日苗と25日苗は130日苗区よりも12～15%減収した。

2) 電照処理の収量・品質への影響

電照無し各苗齢の区をそれぞれ100として電照有り区と同じ苗齢の区と比較した場合、130日苗は電照区が12%増収した。同様に55日苗は24%、25日苗は23%それぞれ電照有り区が増収した。130日小苗だけは、電照有り区が4%の減収だった（表1）。これは130日小苗区が、電照の効果で初期の収量が急激に上がったが、後半の収量が回復しなかったため、総収量が少なくなったものと思われる（データ略）。なお、上中物率は現地圃場では80%前後が一般的だが、今回の試験では40%前後となった。これは試験規模が小さいため交配に蜂が使えず、手交配であったこと等に起因するものと思われる。

旬別の収穫パターンを見ると、収穫のピークは全ての区で7月下旬に現れているが、電照有りの全ての区が電照無しの全ての区よりも多くなった（データ略）。

以上のことから、一般的な電照無しの栽培の場合、採苗の遅い若苗ほど、収穫が遅れ、総収量が少なくなることが分かった。またその若苗も電照を用いることで、花芽分化を促進させ、初期の収量を高め、慣行苗並の収量を確保することができた。

表1 総収量と上物収量（a当たり）

処理区	総 収 量				上 中 物 収 量				
	個数	重量(kg)	慣行比(%)	電照比(%)	個数	重量(kg)	同・比(%)	上中物率(%)	一果重(g)
130日苗	57675	351	112	112	16660	137	119	39	8.2
電照 130日小苗	50654	302	96	96	16501	131	114	43	7.9
有り 55日苗	52717	323	103	124	19397	146	127	45	7.5
25日苗	62911	329	105	123	18326	127	110	39	6.9
130日苗	54502	313	100	100	14161	115	100	37	8.1
電照 130日小苗	54185	314	100	100	15946	125	109	40	7.8
無し 55日苗	44665	260	83	100	12812	104	90	40	8.1
25日苗	45418	267	85	100	15430	122	106	46	7.9

慣行比：電照無し・130日苗区（慣行）を100として比較。電照比：電照無しの各区を100として比較。